「NHKスペシャル　未解決事件　下山事件」について

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　福田玲三

（『地域と労働運動』誌289号：2024年10月に掲載されたもので、その後

字句について若干の加除を行いました）

貴誌284号に掲載されている「NHKスペシャルに注目！」（太田武二）には、問題がありあす。

この寄稿は、去る3月30日に放映された「NHKスペシャル　未解決事件　下山事件」について、「その結論は明確に『他殺』であり、しかもCIAによる秘密工作だったとほぼ断定していたのです。……そこに突っ込んだNHKスペシャルに期待したいと思っています。」と記しています。

しかし、国鉄総裁下山定則氏の轢死は物的証拠により自殺であることは明らかなのです。

だが、いまだに状況証拠による他殺説が横行しているのは慨嘆に耐えません。

他殺説のすべては、東京大学法医学教室による鑑定をよりどころにしています。

つまり、下山総裁は1949年7月「6日早朝、常磐線綾瀬駅ちかくで轢断死体となって発見されたのである。ここで当然、捜査官憲による現場検証がおこなわれた。立会いの監察医は、生体轢断、すなわち生きながら列車に轢かれ命を絶った、という意見であったといわれる。だが、念のため司法解剖を行うことになって、遺体は東大法医学教室に運ばれた。／正午、定例記者会見で、増田官房長官は下山事件にふれ、他殺の見解を打ち出す。根拠は、鉄道専門家の意見ということであった。監察医の意見は無視されたわけである。東大法医学教室における解剖は、それから1時間たって開始され、夕刻終了、結果はただちに警視庁に報告されて、堀崎捜査一課長から発表になった。死因不明、出血が少ないので死後ひかれたと認む。他殺の疑いはあるが断定はできない、というのが発表内容である。／ここから法医学会を二分する、生体轢断か死後轢断か、くだいていえば自・他殺の論争がおきる」（佐藤一著『1949年「謀略」の夏』p.248）

「ここから当然のように自・他殺論争が巻き起こった。その詳細は、『下山事件全研究』で明らかにしたので、ふれない。ただ、現在の法医学の水準ではほとんど論争もおこらず、生体轢断、すなわち自殺という結論になる。」（前著p.251）

東大法医学教室主任の古畑種基は、その著書に「法医学は公安医学である」と書くほどの治安派です。「古畑は下山事件以外でも弘前事件（1949年）、財田川事件（1950年）、島田事件（1954年）、松山事件（1955年）などの事件で法医鑑定にあたり、いずれも誤った鑑定を生み、右のうち3件の被告を死刑という判決に追い込むことに加担している（弘前は懲役15年）。だが、古畑の誤りはほかの法医学者によって糺され、再審裁判で無罪を宣告され」た。（佐藤一著『「下山事件」謀略論の歴史』p.301）

こうして、弘前大学教授夫人殺し事件で、那須隆が再審で無罪となった1977年2月15日から、古畑著『法医学の話』（岩波新書）は出版停止にとなり、ついで絶版になっているのです。

屑籠に入れられたその東大法医学教室古畑の鑑定に、他殺説は今も頼り続けているのです。

その後、交通事故にかかわる「法医学も格段に進歩した。そうした成果に基づき、北大の錫谷徹は、下山総裁遺体の解剖所見を詳細に検討、下山は立位（立った姿勢）でＤ51型機関車に激突、絶命したと判断を下している。」（佐藤一著『松本清張の陰謀』ｐ.70）—　錫谷徹著『死の法医学―下山事件再考』は1983年に刊行されています。

さて、「NHKスペシャル　未解決事件　下山事件」の第1部ドラマと第2部ドキュメントは、そのまま4月29日に再放映されましたが、私はこのドラマを見て、主人公の新聞記者が難しい顔をしてタバコをふかしてばかりいるのを冷笑しました。持って回った末に結局真偽不明でお手上げしているのですから、タバコでもふかして煙にまくしかないのです。

NHKともあろうものが、こんなガセネタをドラマとドキュメントに仕立て、しかも再放映までしたのには、2005年に刊行された柴田哲孝著『下山事件――最後の証言』が推理作家協会賞と日本冒険小説協会・実録賞を受賞し、読売、毎日、中国、神戸、週刊文春、週刊朝日、週刊現代で絶賛され、週刊金曜日と新潮45が柴田本人の自賛の文章を掲載したことにも誘因があるのでしょうか。

もっとも、今回、資料をめくっているうちに、1980年に放映されたNHKテレビドラマ「空白の９００分――国鉄総裁怪死事件」が他殺説だったことを思い出しました。このドラマの脚色者は岩間芳樹ですが、末広旅館の女将長島フクが亭主に、「宣伝になると言ったが、かえって客が来なくなったじゃないか」と言われて、黙りこむカットをいれていました。これは下山が末広旅館で休息したという強烈な事実をぼかそうとする奸智（かんち）の一策です。

新聞社同士の当時の争いに目を移せば、毎日新聞が末広旅館をスクープすると、競争相手の朝日新聞（7月10日付）は旅館の宣伝ではないかと憶測記事をのせ、読売新聞（7月14日付）は踏み込んで、長島フクが、同家の女中に、これはいい宣伝になると漏らした、と書いたのですが、同家の女中は当夜は居らず、誤報であることが、翌15日には明らかになっています。

ここで、柴田哲孝『――最後の証言』の致命的な欠陥を一つだけ挙げてみましょう。

他殺の場合に問題になるのは、その死体を轢断現場に運び込む手段です。現場の地理的状況、当夜の通行人、死体を運搬する者の足場の問題などを検討し、松本清張は『日本の黒い霧』で、轢断列車の約1時間前に現場を通過した占領軍専用の1201列車で運んだとしてこの課題の解決を図りました。ところが清張はこの列車を貨物列車としていますが、現実の1201列車は旅客専用列車です。

この列車が当日、いつものルートを外れて、田端操作場で下山総裁の死体を積み込むようなことはあり得ません。

筆者（福田）は国労書記だった69年11月7日に佐藤一氏と国鉄水戸車掌区を訪ね、事件当日の占領軍1201列車の専務車掌・大内泰弘氏に会い、当日、同列車の運行に何らの異常はなかったことを確認しています。このように清張の「下山事件謀殺論」は崩れ去ったのです。清帳自身1968年1月号の『文芸春秋』別冊に「地を匍う翼」を書いて、「死体を1201列車で運んだというのを取り消し」（佐藤一著『「下山事件」謀略論の歴史』p.295）ています。

ところが、柴田哲孝は、死体の運搬に「進駐軍列車が使われたかのか、それとも東武鉄道だったのかは断定できない」と書いています。東武線は国鉄常磐線（下り）の轢断現場直前で、常磐線と交差しているのです。

東武線も「国鉄と同様全列車の運転士・車掌から事情聴取をし、それらの人名も捜査記録『下山白書』で明らかにされている。以上の結果からみれば、国鉄・東武両鉄道を使った死体運搬は、ありえなかった。」（佐藤一著『「下山事件」謀略論の歴史』p.69）

「柴田哲孝は東武線利用を謳っているが、客車の連結部か車掌室にでも積んで運べると考えているのだろう。だが、運転士も車掌も全部捜査本部の事情聴取を受け、その氏名も公表されている。それらの人の誰かに当たってみるなんて考えてもみなかったのかね。」（前記p.71）

「轢断現場は、東武線のガード下から三・二メートルの所だった。それは、偶然なのか。矢板玄は『東武鉄道は親父が作った』と言った。株を所有し、絶大な権力を行使できる立場にあった。亜細亜産業なら自由に利用できたはずだ――。」（柴田哲孝著『下山事件――最後の証言』p.301）。と柴田は東武線を下山の死体運搬に利用できたはずだとしています。

矢板玄とは亜細亜産業という怪しげな会社のボスで、この会社の工場が五反野の周辺にあり、柴田哲孝の実の祖父がこの会社の一員であり、この会社が下山総裁の拉致にかかわっていたらしいというのですが、こんなことが東武線を自由に利用して下山氏の死体を運ぶ証拠づけになるでしょうか。考えてみれば、『最後の証言』に賞を授けたのが推理作家協会と日本冒険小説協会です。こんな軽薄な逃げ口上も、推理作品であり冒険小説であれば許容されるのでしょう。

さらに柴田は、長島フクが誰かに頼まれて偽証し、それによって多額の謝礼を得たようににおわせていますが、総裁の所作についてのフクの証言には、下山の夫人だけしか知らない、あるいは車の運転手だけしか知らなかった癖が含まれているのに、どのようにして、誰がその癖をフクに教えたのでしょうか。柴田はそれを明らかにしていません。

他殺説は暗闇のなかを手探りで右往左往したあげく結局出口を見つけられずにお手上げで終わっているのです。だからタバコをふかして煙に巻く以外にないのです。

これに比べて下山事件の真相は簡明です。

下山総裁は7月5日の朝9時半ごろ、総裁専用車を離れて三越本店に入った後、地下鉄にむかい浅草を経由して東武線の五反野駅に降り、駅員に「この辺に旅館はないか」と聞き、教えられた末広旅館で午後2時から5時半ころまで休憩し、その後、轢断現場を中心にした半径1キロ以内で、下山総裁の目撃者は15人に上っています。この付近は地付きの人が多く、他所者は目につきやすく、まして身長１㍍70㌢、体重74㌔の大柄で品の良い紳士となれば、目撃者の印象に強く残るのは当然のことです。

末広旅館の女主人長島フクの、この紳士の所作についての女将らしい詳しい証言には、下山夫人と車の運転士しか知らないものが含まれ、そこには下山家のお手伝いさえ知らないものがあったのです。

他殺論者は、轢断現場付近を徘徊していた大柄の紳士は、替え玉であり、これに総裁の服を着せて歩かせたさせたとしていますが、やがて総裁を轢かせようとする現場付近に、なぜ替え玉を歩かせて世間の耳目を集めようとするのでしょうか、替え玉は轢断現場からできるだけ遠く離れたれところに現れ、そこに世人の注目を惹くのが常識ではないでしょうか。

下山総裁の行方不明がラジオを通じて全国に伝えられているとき、もし替え玉が捕まれば、芋づる式に犯行グループが挙げられ、死刑に処せられる恐れもあるのに、そんな愚行に誰が手を染めるでしょうか。これも他殺論者の打った最悪の一手です。

総裁が自殺に至った真因は初老期うつ憂病です。10万人近い国鉄労働者の首を切らねばならぬ立場におかれて苦悩したあげくの発病です。不眠と下痢がこのノイローゼの基本的特徴ですが、その証拠は東京鉄道病院のカルテと下山夫人の発言にあります。総裁は行方不明になる前日の7月4日に関係機関の数か所を矢つぎ早に回っており、それぞれの場所における言動に異常が見られました。総裁のポケットにあった手帳には49年1月1日から6月27日まで、1日も欠かさず、その日の用件や行動が書き込まれていたのに、6月27日にGHQの労働課長である「エーミスに叱られる。決裂のチャンスをつかめと言われた」という乱れた文字が書きこまれて以降、まったく空白になっていました。

当時、米子大学学長であった下田光造は情報を分析し、専門医40年の経験から総裁の変死について「うつ憂病――自殺」という意見を公表しています。（佐藤一著『下山事件全研究』p.600）

これらのことから、警視庁下山事件特別捜査本部は自殺の結論を出すことになり、東大の古畑教授らも、追いつめられた苦悩をにじませながら、今は自殺の結論もやむなしと観念した8月3日の会議。その終了まぎわに、田中栄一警視総監から1本の電話が入り、発表が押さえられました。このとき自殺発表を押さえたのはGHQとも日本政府ともいわれています。

このことに関連するエピソードがありますので、以下に紹介します。

「週刊新潮編集部『マッカーサーの日本』(福田注：1870年刊)中の『下山事件、二つの証言』には、G2公安課員ハリー・シュパック氏のつぎのような証言がある。

『事件から一カ月ぐらいたって、私は”自殺“の線の報告書を出した。その結果、ウィロビー少将（注＝GⅡの長、反共で有名）のオフィスからプリアム課長を通して私に与えられた指示は”他殺として扱え“ということであった。その指示は、文書で私に与えられた。そこで私は田中総監に会って、口頭で”他殺として扱え“といったら、田中は”ノー“と答えた。田中はサムライで、誇り高い男だった。”イヤだ、同意できない”とハッキリいった。田中は非常に困惑した表情でそういった。

　そこで、私と田中は歩み寄りを考えた。それは“では、必ずしも他殺ということでなく、自殺、他殺両方の可能性を含む線を出そう。少なくとも、自殺とハッキリ言明はしない。ということに落着いた。—GHQの目的は、そのように扱うことによって、共産党に圧力をかけることであった。この目的は、プリアムが私に言葉でそういったわけではない。しかし、当時のフンイキは、誰もが共産党の仕わざだと思っていたし、公安課の空気からいっても、プリアムの意図は明瞭に読み取ることができた。冷血な殺人者、腹黒い暴力者としての共産党……、その印象を、人々の頭の中に残しておく必要があった。それは純然たる政治的宣伝である。自殺ではなく、他殺のニオイを残して迷宮入りにすれば人々がいろいろと憶測する。その結果、共産党に圧力がかかる。そういう筋書きであった。」（佐藤一著『下山事件全研究』p.585）

　以上が下山事件の真実です。